

国病久原会への新年御挨拶

長崎県病院企業団企業長 米倉正人

あけましておめでとうございます。COVIT-19の流行が始まって、2回目の新年を迎えます。皆様いかがお過ごしですか。

この2年間、我々年を取っている者にとっては、身を潜めての生活は、若者ほどには堪えなかったように感じていますが、これから社会に出て仕事を始める若者にとっては、つらいまた、ストレスの多い2年間ではなかったのではないのでしょうか。最近では、また新しいオミクロン株のウイルスが出てきています。これからは、医療人として with corona の世界を生きていく覚悟が必要になるでしょう。

さて、話は変わりますが、今私は長崎県病院企業団に籍を置いています。離島の病院を統括しているところです。長崎医療センターは、50年以上、離島の親元病院として、離島の医療人はもとより、離島の住民の患者さん方にも信頼されてきました。最近残念に思うことは、長崎医療センターの職員に、離島の親元病院としても意識が低くなってきていることです。このため、特に救急の患者さんが、長崎医療センター以外の病院に運ばれる症例が増加しています。さらに、これまで県の養成医は、研修医の時期を長崎医療センターを中心に育ってきました。しかし、年間の研修医が20名を超える状況となり、長崎医療センターだけでは、対応が難しくなっています。特に、新専門医制度が、大学のプログラムとなり、今後、育っていく医師たちは、より大学の各医局とのつながりが、大きくなり、長崎医療センターとの関係は希薄となっています。時の流れで、古いシステムが変わっていくのは、ある程度仕方がないのかもしれませんが、長崎医療センターが、離島の親元病院としての役割を続けていくのは、より難しくなっていくような感じがしています。

新年早々の苦言になってしまいましたが、長崎医療センターで育ってきた私にとっては一抹の不安を抱えています。